

イランの思い出

野瀬隆平

近ごろテレビや新聞でよく見聞きするイラン。そのたびに、記憶の底に沈んでいた地名が甦ってくる。

一つは「カーク島」である。今からもう60年近くも前のこと、造船所に就職して間もなく、船会社への出向を命じられた。「お前ら船を売っているが、その船でどのように商売をしているのか、勉強して来い」ということだ。配属されたのは、油槽船舶というタンカーを運用する部門だった。

原油の多くはペルシャ湾にある中近東の諸国からで、その積出港の一つにイランの「カーク島」があった。積出地はなぜ島なのか。理由は水深である。10万トンクラス的大型タンカーの場合、原油を満載すると吃水は14～15mとなるので、それだけの水深が必要なのだ。

運行計画を立てるたびに積出地を記載することになる。何度も「カーク島」と書いたので記憶に残っていたのである。

もう一つの地名は「バンドル・アッバス」である。ペルシャ湾の出口、ホルムズ海峡に近い港町だ。こちらは今から50年程前の話になる。造船会社に戻ったあと、今度は船に関する技術を売る担当に変わった。私のいた造船所は、ブラジルやシンガポール政府との合併で現地に造船所を作った実績があったので、造船所を建設して欲しいと要請してくる国が少なからずあった。

その国の一つがイランだ。自国の石油が世界の各国に運ばれてゆく。それならば船を自国で作ったら良いではないかという発想である。

イラン政府が考えた建設候補地が、このバンドル・アッバスだった。非常に暑い。また、3Kの代表と云われる造船の仕事に向いている国民とはとても思えず、この話は沙汰やみとなった。

ところで、ペルシャ湾の入り口のところをどうして「ホルムズ海峡」と呼ぶのか。バンドル・アッバスの沖に「ホルムズ島」という小さな島があり、その名にちなんでということだ。かつては、ここにホルムズ王国があり、11世紀頃ペルシャ湾に面する交通の要所として栄えていたという。

